魔法少女だよ緑谷ちゃん！

逆傘

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無個性の少女、緑谷出久。周りから無理だと言われても、彼女はその夢を諦めなかった。そんな彼女の前に現れたのは…

魔法少女デクちゃんが魔法と物理の力を使い、雄英高校でヒーローを目指すお話です。

リアルが忙しいのでかなり不定期です

目次

キャラ紹介＆能力詳細 ―― 1
魔法少女始めました
魔法少女になった緑谷は雄英高校でヒーローを目指す ―― 6
変身するとか聞いてない！ ―― 10
魔法をちょっと使うよ！ ―― 13
試験に行こう！ ―― 16
雄英高校にて
いよいよ登校！ ―― 21
雄英高校入学し…えっ？体力測定？聞いてないよ ―― 24
ヒーロー科らしいやつ来た！ ―― 27
新キャラ来たる ―― 31
なにも起こらないわけがない ―― 34
なんかいる… ―― 37
いざ脱出 ―― 40
脱出後 ―― 43
どうする？どうする？ ―― 45
普通科視点のヒーロー科
本編の合間に～普通科生徒の見聞録～ ―― 49
本編の間に～普通科生徒の言うことには～ ―― 52

キャラ紹介＆能力詳細

☆ここでは、魔法少女だよ緑谷ちゃん！に出てくるオリキャラや原作メンバー、緑谷ちゃんが持っている魔法の説明をしたりします。新しい設定が出る度にちょこちょこ更新していくので、新しいオリキャラや能力が出たと思ったらここへ来てください。忘れていなかったら新しい設定が書いてあるはずです。

☆緑谷出久　　♀

無個性だった少女。ミリカヤと名乗る魔女から力を貰い、魔法少女となった。その力を使い、夢であった雄英高校のヒーロー科を目指す。うちで書いている緑谷ちゃんはのないすばでいです。でも筋トレしてるので、筋肉も程よくついてます。羨ましいね。そして峰田くんにセクハラされるのもまた運命…

安心してください。セコムがいます。

☆ミリカヤ・ソルルーセル　　？

緑谷の夢に現れ、緑谷に力を渡した自称魔女。

本編では彼女とあるが、性別はないらしい。魔女はみんなそうという訳でもなく、彼女が特別な存在だったようだ。ちなみに〝魔女〟というのは、魔法を使えるものは全て魔女と言うので、昔には男の魔女もいた。

名前からわかる通り、日本人ではないが、住んでた土地を追われ、海を越えた先にあった日本にたどり着き、住み着いたそう。結局魔女狩り（当時は妖怪狩りの一環だった）にあい、亡くなってしまったが、魔女と知りながらよくしてくれた緑谷のご先祖さまに、私の力をあなたの子孫にという願いを残し、死んでから力を渡そうとしたら個性が邪

魔して力を渡せなくなってしまった。やっと巡り会えた緑谷に魔法を渡し、思いを遂げた。
主に身体能力向上系魔法と筋肉に頼るマッスル系の魔女だったとされている。
名前は適当に決めた。反省はしているが後悔はめんどくさいのでしない。
☆アメリス・サクリアス　♂
長寿の魔女の二つ名を持つおじいちゃん。見た目は２０歳くらい。赤いショートボブの髪に白色のメッシュが入っていて、いかにも魔女っぽい服装をしている。ミリカヤとは友達だった。緑谷の前にちょくちょく現れて、魔法のコツを教えて帰る。最近物忘れが激しいらしい。得意な魔法は広範囲殲滅魔法。だから教えると言うよりは遊びに来てるだけ。すごい怒って小国１つ消し去ったこともあったりなかったり。
☆咲楽崎　花形　♂《さくらざき　かぎょう》
ヴィラン側にいる。２８歳変態紳士。
個性　植物開花　触った所に自分の知っている中の任意の花や葉を開花させる。
彼は人を殺ったあとに身体中に任意の花を咲かせ、それを作品として絵を書く。書いたあと、咲かせた花などは美味しくいただく。最近は揚げることがトレンドらしい。主な武器は毒が付いた針。こわっ。見た目はふわふわの水色の髪で燕尾服着てる。タレ目で童顔でおっとりした感じなのに…。私はなんでこんなキチガイ作ってしまったんだ…我、私、僕、俺など色々使う。
☆モブ達
何の変哲もない、ただのモブ。緑谷をけなしたり馬鹿にする者もいるが、大体がガヤの役割でしか出ない。ついでに名前もない。セコム爆豪に睨みをきかされ、最近はちょっと大人しい奴らもいる。１人居たら３０人居ると思え。
☆かっちゃん
恋する少年。無自覚である。雄英高校は緑谷には危ないから入ら

ないで欲しい…と無意識に思い、緑谷に暴言を浴びせる。頑張れかっちゃん。緑谷に思いを伝えるその日まで。ただしこの小説では多分無理。

☆オールマイト

オールなマイト。３話もたって名前しか出てこない。ほとんど原作通り。

あんまり出ない。ワンフォーオールはミリオに継がせることになるかもね。でもそこまで考えてない。まずそこまで続く気がしない。

☆プレゼント・マイク

めっちゃうるさい。原作通りの人でござる。髪型がキバタンに似てる。

☆飯田天哉

メガネ。スゴいエリート中学校でてる。原作通り。飯田くんっていい子だよね。

☆麗日お茶子

うららか。出久ちゃんに助けられる。その後立派なセコムとなる。うららかでも無くなる。

☆相澤せんせー

原作通り。抹消ヒーロー。作者は最初寝袋に入って登場する相澤せんせーを見てそれがこのキャラの個性か…芋虫かな？と一瞬思ったりした。

◇能力詳細◇

身体強化［パワーアップ］

かけられた者の五感と身体能力を2倍に［第3話時点では5倍］に強化させられる。自分にもかけることが出来る。

・効果範囲→単体▶単体　★重ねがけ可能

・効果時間→３０秒▶１分

＊成長上限に達しました＊

【発動条件】技名を言いながら身体強化をかけたい人を指さす

回復［ヒール］
かけられた者の傷を癒す。直せる傷の程度は擦り傷程度。病気を治すことは出来ない。
⇩
直せる傷の程度は大きな傷や骨折程度。
【発動条件】技名を言いながら治したい傷口の上に手をかざす

睡眠［スリープ］
対象を眠らせる。起きた時はとてもスッキリする。
・効果範囲→自分を中心に直径３ｍ▶自分を中心に直径５ｍ
・効果時間→２０秒▶３０秒
【発動条件】かけたい対象が自分を見ている時のみ発動可能

束縛［バインド］
対象を縛る。全世界のＭが喜ぶ。１人ずつしか束縛出来ない。
【発動条件】技名を言いながら対象に指さす

命令［コマンド］
かけられた者の行動を指示できる。かけられた者が出来ないこと、または知らないことは指示しても意味が無い。
【発動条件】技名を言いながらかけたい相手に1部分でも触れる

透明化［インビジブル］
透明になれる。他人にかけることも出来る。葉隠さんと被った。
・効果範囲→単体▶単体
・効果時間→２０秒▶４０秒
【発動条件】技名を言いながら対象に五本指で触れる

消音［サイレンス］
音を消す。それ以外説明しようがない。

・効果範囲→自分を中心に直径１０ｍ▶自分を中心に直径２０ｍ

・効果時間→１５秒▶３５秒

【発動条件】技名を言うだけ

魔法少女始めました
魔法少女になった緑谷は雄英高校でヒーローを目指す

世界の人口の約８割が何かしらの〝個性〟を持つようになった。しかし、彼女は違う。個性と言うにはあまりにも万能すぎるその力。彼女が持つのは個性じゃない。彼女が持つ特別な力。それは――――

◇緑谷出久は魔法少女◇

オールマイトのような笑って人を助けられるようなヒーローになりたい。ずっと僕はそう思っていた。でも世界は残酷だった。そう気づいたのは５歳の時。お医者さんに言われたのは、私がなんの特殊な力も持たない

《無個性》だという無慈悲な診断。オールマイトに憧れ、ヒーローを目指していた僕には相当なショックだった。

それでも僕は、諦めなかった。かっちゃんや周りからは散々にバカにされ、笑われた。「「お前にヒーローは無理だ」」そう言われ続けた。でも、たとえ無個性だったとしても、ヒーローと言う夢だけは諦めきれなかったんだ。

でも現実は、世界はやっぱり残酷だった。中学校で進路指導があった。もちろん僕は、最高峰のヒーロー育成学校、雄英高校のヒーロー科を第１志望にすると先生は、

『緑谷、お前には雄英は無理だろう。悪いことは言わないから、他の高校にしとけ。』と言われた。

そう言われるだろうな、とは思った。でも僕は諦めない。たとえ無謀だとしても、挑戦したいのだ。そう言うと先生は何を言っても無駄

なんだろうな…という顔をし、進路指導を終えた。
家に帰っても、私は雄英に入るために筋トレをしていた。体を鍛えることしか出来ないからだ。入試までに個性を伸ばす訓練をするところだが、あいにく伸ばせる個性がない。個性があったらな…そう思いながら筋トレを続けた。
「今日はこれくらいにしとこう…明日は土曜だから筋トレ多めにしようかな…」
いつもの日課の筋トレを終え、風呂に入り就寝した。

――――――その日緑谷は不思議な夢を見た。

〈ねぇ…私の声聞こえてるでしょ…こっちよ…そうこっち…〉
不思議な声が聞こえた。甘くて優しい声。声のする方に目を向けてみると、薄いピンクのドレスを着た、青い髪の女の人が佇んでいた。
〈あぁ…あなたが緑谷出久ちゃんね…はじめまして…〉
誰だ？こんな知り合い僕にはいないし…なんだろうこの夢…。そう考えていると、彼女はこっちの考えを呼んだかのように、こう続けた。
〈ごめんなさい…自己紹介が遅れたわね…私はミリカヤ…魔女だった者よ…私は魔女狩りにあって処刑されてしまったけど…あなたのご先祖さまに約束してもらったの…私の力を子孫の誰かに受け継がせると…私が死んで、いざ引き継がせようと思ったのだけど、その時ちょうど人々が個性が発現するようになって…どうやら私の力と個性が競合して力を渡せなくなってしまいここまで来ちゃったの…〉
知らない話ばかりで頭が混乱する。先祖？魔女？なんの事だかさっぱりだ。そんな僕の心を知ってか知らずか、彼女は話を続けた。
〈今までは身体が未熟だったから…成長するまで待ってたんだけど…もうそろそろかなと思って…どうかしら…私のこの力…貰い受けてくれないかしら…もう多分こんなチャンスはなかなかないと思うの…〉

まだ頭が混乱しているのにそんな事言われても…でもその力さえあれば僕は雄英へ入れる確率が格段に上がる。かなり考えた結果、僕は答えを出した。
「分かりました。その力を僕に下さい。でも使い方がわからないから、教えてください。」
そう言うと、彼女は嬉しそうにした。
〈ありがとう…ええそうね…私の力の使い方…教えるわ…でももうあなたが目覚めてしまう…だから今回は大まかに言うわね…あなたはこれからこの時代で言う［魔法少女］とやらになってもらうわ…〉

えっ？魔法少女??なんで？いやいやいやおかしいでしょさっきまですごいシリアスだったじゃん！魔女から力を貰ったら魔法少女とかおかしいよ！
〈だって私は元から魔女だったけど…あなたは人間だし…変身でもしないと力は使えないわ…変身するのは魔女じゃないわ…どっちかって言うと魔法少女よ…〉
変身て！まんま魔法少女じゃん！どうしよ…でももう下さいって言っちゃったし…ええいままよ！魔法少女だかなんだか知らないけど、なんでもかかってこいや！（ヤケクソ）
〈あらもう目覚めかけてるわ…詳しい説明は、今日の夜の夢の中でさせてもらうわ…改めてお礼を言わせてもらうわ…本当にありがとう…〉
そう言って女性は消えていった。と同時に僕も夢から覚めた。
……なんだったんだあの夢…すごくリアルだったけど…それにしても変身？ははっよくできた夢を見たなぁ。変身って言ったら…こうかな？
「へーんしん！」
なんちゃって！夢だし本当に変身なんてするわけな…へ？

突然、僕の体が光り輝く。その光に包まれたあと、僕の服はパジャマじゃなくてペチコートでふわふわでリボンがついた緑色のザ・魔法少女みたいな服に変身した。

「……嘘でしょおおおおおおおおおおお!!」

漫画みたいな方法で、魔法少女になった僕。なんでこうなるのっ！

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

変身するとか聞いてない！

朝からとんでもないことになってしまった。まさか本当に魔法少女に…？いやおかしいよ！なんでこんなスカートふわっふわなの！真ん中におっきいリボンもあるしもうこれ完全にプ〇キュアじゃんプリキ〇ア！こんなのでどうやってヒーローになれって言うのさ！

ううっ…今夜夢の中であったら文句言ってやるんだから…それにしてもこれどうやって戻そうか…さっき変身！って言って変身したから…

「もっもとにもどれっ！」

そう言うと衣装が輝き、花びらとなって落ちていき、もとのパジャマ姿に戻った。良かった…このまま全裸かと思った…ってそうじゃないよ！僕これでヒーローになるとか嫌だよ！もーっなんで力を貰うなんて言っちゃったの僕…

とりあえず夜まで待つか…僕の夢にしか出ないんだし…そう思い、夜寝るまで魔法は使わなかった。いや、正確には使いたくなかった。もうあのふわふわふりふりの服は着たくない…

――――――――緑谷の夢の中にて

〈早速私の力を教えるわね…まずは私の特性を…〉

「すみません、その前にひとつ…」

あれだけ言っておかないといけない。あれだけは絶対に譲れない。

「あの変身した時の衣装どうにかなりませんか」

あの衣装では雄英高校は行けない行きたくない。ただの頭のおかしいやつだと思われる。

〈あら…魔法少女はこういうの着てるから…いいと思ったのだけど…じゃあこれはどうかしら…〉

そう言って彼女は僕に手をかざし、何かの呪文を唱えると、服がどんどん変わっていく。白いブラウスの上に袖が長い黄緑のローブ、

ショートパンツに細めのベルトと胸元に添えられた小さなリボン。少しかかとが高いブーツに、頭にはカチューシャ。最初の時よりいくらか地味になった。

…まぁ許容範囲内かな。服はこれでよしとして、早速その魔法を説明してもらわないと…

〈あなたは今、私の力を使うことが出来る魔女モードになっているわ…でも私どっちかって言うと補助系の魔法得意だったから…あなたも補助系の能力中心になっていると思うわ…〉

補助系魔法？どういうのだろうか？

〈補助魔法は言い換えたら非攻撃魔法…相手を束縛したり…攻撃力や防御力を上げたり下げたりできるわ…もちろん怪我の回復もできる…結構万能なの私…〉

自分で言っちゃうのか…そうか攻撃的な魔法だと使い勝手に困るけど、そういうのは嬉しいかな。

〈今あなたは力を使えるようになったばかり…ほとんどの力は封印されてしまっているわ…今あなたが使えるのは、身体強化［パワーアップ］と回復［ヒール］ね…使いたい時はそのまま名前を言ったらいいから…これらもちゃんと進化するから…コツコツ鍛えれば強くなれるわ…〉

なんか変身すること以外魔法少女じゃない…使う魔法は体力任せのごり押しプレイになるよなこれ…

〈私…魔法で倒すと言うよりも攻撃力あげて物理で殴る方が向いてたのよ…周りの魔女からも物理の魔女って言われてたわ…魔法使いなのにそれってただの武闘家じゃない…〉

筋肉系の魔法少女になるのか…多分だけどこれから習得する魔法もそんな感じだろうな…でもこれで僕もヒーローになれる希望が出てきたんだ。そう考えるとこの力を貰い受けてよかったかも。

〈力を伸ばすには…あなたの場合筋トレね…漫画でよくある経験値というものがたまってレベルアップするわ…直接はわからないだろうけど…効果時間が伸びたり…より強くなったり…効果範囲が広がったりするわ…ちょくちょく確認してね…あと規則正しい生活を送る

ことかしら…よく寝て英気を養えば…魔法を使える回数を増やすことができるわ…あんまり使いすぎると…死にはしないけど…身体が動かなくなっちゃうわ…使いすぎる前に脱力感があるから…わかりやすいと思うけど…〉

ゲームで言う、ＭＰみたいなものかな？動けないのは困るな…

〈魔法少女でよくあるステッキとかはないわ…出すことはできるけど…あれは非効率的よ…元々何も無くても魔法を出せるのに杖に魔法を通す必要なんてないわ…〉

そうなのか…確かにそういう仕組みなら非効率的だな。

〈あと○リキュアみたいに長い変身シーンもないわ…効率悪いしプリ○ュアみたいに変身中に攻撃されないとかないから…普通に変身中でも攻撃受けるし…〉

…それはなくて良かった。ん？変身中でも攻撃受けるって知ってるってことは…？いや、やめておこう。

〈私は…あなたを…こんな形でしか…サポートすることが…出来ないけど…あなたの夢が…現実になることを…祈って…いるわ…〉

そう言うとスっと消えた。そして僕も目が覚めた。前より、消えるのが早かった気がする。声も聞き取りづらかったし…何かあったんだろうか…

それより！せっかく教えて貰ったんだから、早く忘れないうちに力を使っておこう！まだまだ使えるものは少ないけど…それでも雄英の入試までにはまだ時間があるから間に合うはず。貰った力を無駄にはしない！

僕は絶対、雄英高校に入ってみせる！そのためにこの力を入試までには使いこなしてみせる！

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

魔法をちょっと使うよ！

前に魔女さんが言っていた、魔法…実感があんまりわかないんだよね…どっちも見た目で分かりにくい魔法だし…とりあえず身体強化使ってみよう。

僕は厚めの板を用意して、板割りをしてみる。身体強化をかける前に本気でやってみる。厚さが８センチもあるからか、ビクともしない。すごく手が痛い…

次は身体強化をかけてみる。そうすると割るまでは行かずとも、大きなヒビが入った。もう少しで割れそうだ。まだあんまり強くないけど、レベルアップ可能って言ってたし、まだまだ強くなるよね！

次は回復。さっき身体強化をかける前に板を殴った手が少し擦りむいていたから、そこに手をかざし、回復をかけてみる。そうするとみるみるうちに怪我が跡形もなくなくなった。これもぜひ入試までには伸ばしておきたいな。受験日まであと１０ヶ月。少しでも多く魔法を習得し強くして、入試に備えよう。

こうして僕は入試に間に合うように、特訓を始めた

。特訓って言っても、ひたすら筋トレをして、自分の能力が伸びたか確認しての繰り返し。新しい魔法が使えるようになったら、夢の中でミリカヤさんが教えてくれる。魔法を鍛えてから1ヶ月、新しい魔法を2つ習得していた。

＊夢の中にて

〈あら…新しい…魔法の…封印が…解けている…1つは…睡眠［スリープ］…もう1つは…束縛［バインド］ね…1ヶ月で…これなら…夢はすぐに…叶うんじゃないかしら…〉

いつものようにミリカヤさんに説明を受ける。ここ最近、どんどんうすくなっている気がする。

〈これからは…私に…聞かなくても…自分の能力が…伸びたか…新し

い魔法を…習得したか…分かるように…しておくわ…私は…あなたに…渡した…力で…存在…していた…か…ら…もう…消えるわ…元は…もう…死んでいる…から…でも…あなたは…私より…強くなれるわ…頑張って…ね…〉

そう言ってミリカヤさんは最後の仕事を終えたのか、満足そうな顔で消えていった。目が覚めた僕は、少し寂しい気持ちになった。雄英高校への道を開けたのは、彼女のおかげだった。彼女がくれたこの力を、無駄にしないように僕はいっそうトレーニングにはげんだ。

そうして1ヶ月、また1ヶ月と過ぎていき、あっという間に雄英高校入試まであと1ヶ月という所に迫ってきていた。新しい魔法を新たに3つ習得し、今使える魔法の全てのレベル上げも行った。新たに習得したのは、命令［コマンド］、透明化［インビジブル］、消音［サイレンス］だ。ミリカヤさんがいなくなって、魔法の封印が解けたか、魔法が進化したかは能内アナウンスで分かるようになっていた。その声はとてもミリカヤさんに似ていて、少し嬉しかったな。あと1ヶ月、伸ばせるところまで伸ばしておきたい。

いつものようにブツブツ言いながら歩いていると、かっちゃんにあった。かっちゃんはお前に雄英は入れねぇ、って言われた。他にもなにか言われたけど、もう僕は、君やみんなに笑われて俯いていた、あの時の僕とは違う。僕は雄英に入ってみせる。いや、入るんだ！

「僕は絶対にオールマイトのような笑って人を助けられるヒーローになるんだ！」

まさか言い返されると思ってなかったかっちゃんが驚いているうちに、僕はそそくさとその場を後にした。

・かっちゃん視点

あいつは、小さい頃からヒーローになりたがってた。俺が個性が出現した時、輝いた目で、

「いいなぁ…僕も早く個性でないかなぁ」

と言っていた。結局あいつに個性なんて出なかったが。でもあいつはなぜか諦めなかった。無個性のクソナードがヒーローなんてなれるわけがねぇ。モブ共からもそう言われ続けていたのに、あいつはヒーローを諦めなかった。雄英の入試まであと1ヶ月。俺はあいつに何とか志望校を変えさせるためにボロクソに言った。だが、あいつはいつものように俯かず、真っ直ぐ俺の目を見て言いやがった。

「僕は絶対にオールマイトのような笑って人を助けられるヒーローになるんだ！」

言い返してきやがるとは思ってなかった。呆然としているとあいつは足早に去っていった。その後ろ姿を、ただを見ることしか出来なかった。なぜそんなにあいつに執着しているのか、今はまだ分からなかった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

試験に行こう！

――――――――いよいよ試験当日

はー…すっごい緊張する…雄英高校って名前だけでもう緊張が止まらないよ…いや！力を貰ってから、やることは全部やった！最大限に力を引き出して頑張るしかない！

そうして僕は雄英高校への道を踏み出した！

…と思ったら自分の足につまづいてコケそうになる。気合い入れた途端にこれだよ～もう…

自分のどんくささを嘆いていると、体が浮いた。

「転んじゃったら、縁起悪いもんね！」

どうやらこの女の子の個性のようだ。

「じゃあね！」

そう言って彼女は足早に去っていった。…ほかの受験者の子と喋っちゃった！（喋ってない）…あっこんなことしてる場合じゃない！早く行かないと！

そしてなんやかんやあって実技試験…

うわーまた緊張してきた…隣にはかっちゃんいるし…目を合わせられないよ…

《実技試験説明のくだりは原作と一緒なので割愛。書くと長くなるので。決してめんどくさくなったわけでは…（図星）》

良かった…かっちゃんと試験会場別だった…一緒だったら敵と一緒に爆散されるところだった…オドオドしていると、朝転びそうになったところを助けてくれた女の子を見つけた。お礼を言おうとかけよろうとした時、試験前にプレゼント・マイクに質問をしていた眼鏡をかけた男の子が僕の肩を叩いた。

「あの女子は精神統一を図っているんじゃないか？君はなんだ？妨害

目的で受験しているのか？」
うう…確かにそうだ…言い返せない…周りも1人敵が減ったラッキーみたいな顔してるし…そう考えているとプレゼント・マイクの声が聞こえた。
「はいスタートォー！」
みんな面食らっている。そこにプレゼント・マイクは続けた。
「どうしたァ！実戦にカウントダウンはねぇんだよォ！走れ走れェ！賽は投げられてんぞォ！」

受験者達が弾丸のように飛び出す。僕は1歩遅れてしまった。急いでいかなきゃ！僕も慌てて飛び出した。みんなおのおのの個性でロボと戦っている。どうしよう…僕は複数の魔法を持っているけど、ロボを倒せるような力はない…辛うじて束縛で動きを止めることはできるけど…それでは倒したことにはならないし…命令と睡眠だって人にしか効果はなかった。つまりここでは意味なし。ほかも全然使えない…辛うじて身体強化だけは使える…あれは重ねがけができるけど体の負担が凄いんだ。どうしよどうしよ！これじゃあ合格なんて絶対できない！考えろ…どうしたらいい…？さっきの女の子は
「これで２６ポイント…」
って言ってるし！僕まだ０ポイントだよ！急がなきゃ！
そんな時他とは違う、一際大きなロボが目の前に現れた。受験者達も思わずたじろぐ。みんなもちろん戦わずに逃げる。僕も慌てて逃げようとしていた時、女の子の声が聞こえた。朝に助けてくれた女の子だ！足が挟まって逃げられなくなってる。今の束縛の魔法ではあの大きなロボを止めることは出来ない。もしここであれを倒したとしても０ポイント…あと２分で次を探すのは難しいだろう。でもここで彼女を見捨てて逃げたら、彼女は…
僕は変身し、自分の体に何回も身体強化をかけた。身体が軋む音がする。でもまだこれじゃ足りない！もっと身体強化をかけた。身体強化、身体強化、身体強化、身体強化、身体強化、身体強化、身体強化！魔法をかけまくった身体で大きく跳躍する。何十倍にもなった

僕のパンチはロボを倒すのには十分だった。バンッという音と共にロボの顔が大きく凹んだ。ロボを倒した。でも身体強化をかけまくったおかげで身体中が痛い。特にロボを殴った手は血まみれ。身体能力強化はまだ続いているけど、身体中の脱力感で力が入らない。これじゃ受身が取れない！このまま落ちてったら僕確実に死ぬ！どうする？身体能力強化を信じてこのまま落ちる？もしかしたら防御力も上がってるからまだマシかもしれない。それかまた重ねがけをするか？いやもう変身が解けるくらい力がなくなってる！

あと数メートル…という所で、誰かが僕の頬を叩いた。女の子の個性で宙に浮き、僕はゆっくりと下に降りた。

彼女はキャパオーバーしたのか思わず吐いてしまった。僕はまだ1ポイントも取っていないことを思い出し、まともに動かない身体を必死に動かした。

「せめてあと1ポイント…」

それも虚しく、実技試験終了のブザーがなり、僕は0ポイントで実技を終えてしまった。

バキバキに折れた身体より、心の方が痛かった。僕の夢はここで途絶えてしまった。

「出久…ねぇ出久…ねぇって！大丈夫？なに魚と微笑みあってんの？」

どうやらボーッとしていたようだ。

筆記の試験は自己採点でギリギリＯＫ。だけどそれではカバーできないほどの実技試験での圧倒的０ポイント。終わった…お母さんは慰めてくれてるけど…はぁ…

「いいいい出久！来てる！手紙！雄英から！」

どうやら手紙が来ていたようだ。うわ雄英からの合否通知がきた…どうしよう…考えられるのは不合格の３文字

。うぅすごく開けたくない…
ええい！その時はその時だ！手紙を縦にあけた。すると何かがでてきた。丸い円盤？戸惑っているとその円盤から映像が映し出された。
「わーたーしーがーきたー！」
ええっ！オールマイト!?驚いている僕をよそに（映像だから当然なのだが）オールマイトは話を続ける。
「君は筆記はよかったが、実技試験では０ポイント…。当然君は不合格だ。しかし、これを見てくれ。」
そうするとまた別の映像が映し出された。そこにはあの女の子がいた。
「あの…緑髪でモサモサ頭でそばかすがある［男の子］…知りませんか？」
えっ？僕は一応女子…あぁそうか！僕顔だけ見たら中性的な顔だし、一人称僕だし、胸も思いっきり潰してたからかな…緊張して猫背になってて胸もあんまり見えてなかっただろうし、女の子より筋肉質だったし…変身中に落ちてたらよかったんだけど、落ちた頃には変身とけてたし…声もあの子には聞かれていないだろうし…そっか…もうちょっと女の子らしくしたらよかった…
「あの子に私のポイントを分けるって出来ませんか？あの子せめてあと１ポイントって言ってて、もしかしたらあの子、まだ０ポイントだったんじゃないかって…だからせめて私を助けてロスしちゃった分をあげたいんですけど…」
そうだったのか…嬉しいな…
「さすがにポイントを分けると言うようなことは出来ない。しかし、ここはヒーロー科。人助けをした者を不合格にするわけが無い！緑谷出久！レスキューポイント６０ｐ！麗日お茶子！レスキューポイント４５ｐ！君は合格さ！」
えっ…てことは僕…合格したの？えっえっ？うそ…ええええええええええええ！やった！合格したんだ！憧れだった雄英高校に受かったんだー！やったやった！

少し前の僕じゃ考えられなかった。体つきも結構しっかりしてきた。まだまだこれから、スタートラインに立ったばかりなんだ。ここからが僕のヒーローアカデミアだ！

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

雄英高校にて
いよいよ登校！

はわわ…合格したんだ…未だ実感がなくてぼーっとする。お母さんは涙を流して大喜びしてくれた。本当に諦めなくて良かったな。あっとその前に…個性届どうしよう。僕は無個性だったから個性届は無個性で出しているんだよね…

いろいろ調べてみたら、どうやら個性届は変更が効くみたいだ。でもこれって個性…じゃないよね…どうしよ…もう魔法「マジック」とかでいいかな…本当のことだし。よし個性届も書いたし、あとはまた入学の準備を進めよう。はぁーそれにしても我ながらネーミングセンスが…

そして雄英高校へ行く日が来た。憧れだった雄英の制服…ふふっなんか嬉しい！…さすがにスカート履いてるから、男子と間違われることはないだろうし…

「出久！ティッシュ持った？ハンカチは？ハンケチーフ！」

持ったよ！心配症だな。

「あああと出久！かっこいいよ！」

「…うん！」

僕は意気揚々と家を出た。雄英高校までの道を歩けば歩くほど楽しくなってくる。雄英高校まではあっという間だった。僕のクラスは1のA。すっごい廊下長かった。ていうかドアデカっ！すごいデカい！かっちゃんとかあのメガネの子とかと一緒じゃないといいな…そう切実な気持ちで思い切ってドアを開けた。

「机の上に足を置くんじゃない！先輩方や机の製作者様に失礼だと思わないのか！」

「思わねぇよ！てめぇどこ中だぁ？」

「ぼ…俺は私立聡明中学校の者だ。」

「聡明ぃ？クソエリートじゃねぇか！ぶっ殺しがいがあるなぁ!?」

「殺すって君は本当にヒーロー志望なのか!?」
ひぇぇ…両方いた…と萎縮していると2人ともこちらに気づいたようだ。
「ちっ…」
ひぇかっちゃん舌打ちした…
「君は…」
メガネの男の子が近づいてくる。その表情はどこか驚いているようだ。
「君は女子だったのか…!?済まない、あの試験の時はきつい言い方をしてしまった。君はあの試験の仕組みを理解していたんだな…俺は気づけなかった。」
ごめんなさい理解してなかったよ…そしてやっぱり男だと思われてたか…やっぱりちょっとは女らしくしとこう…
そう霹靂していると後ろから声が聞こえた。
「君はあの時の!女の子やったんやね!」
あの時コケそうになった僕を助けてくれた子だ!あれ?今になって気づいたけど、よく考えたら僕制服着てた時に会ったから女って気づいてたと思うんだけど…
「そういや女子の制服着てたのにおかしいなって思っとってん。触れたらあかんとこかなって」
そういう事か…優しさが染みるよ…でもちょっと心外というかなんというかごによごによ…
また後ろから声が聞こえた。今度はさっきよりも低い声。
「さっさと座れ、合理的に進めろ」
ホワァッ!ビックリした芋虫!?と思ったら中から人が出てきた。どうやら担任…のようだが…担任?この人もヒーローなのかな…僕が知らないヒーローがいるとは…
「じゃあ早速だがこれ着てグラウンド出ろ。」
先生は雄英高校の体操着を見せた。みんなが戸惑いながらグラウンドへ向かう。
「これから体力測定を行う。」

『『へぇ!?』』

グラウンドになんとも間抜けな声が響いた。

●●市にて

彼女は品がいい。動きも洗練されてて上品だ。道が分からないと聞けば私にわかりやすいように丁寧に教えてくれる。お礼がしたい、少しこちらに来て、と言えば怪しい路地裏にも来てくれる人を信じやすいタイプだ。彼女に似合う花はやはり薔薇が、白い薔薇が良いだろう。あぁ…良く似合うよ…本当に…

――――素晴らしい作品だ。

――――――――今日未明、●●市で３０代女性の変死体が発見されました。いつまで経っても家に帰ってこないことを不審がった夫が警察に捜索依頼を出したところ、発見されたということです。被害者の体の至る所には白い薔薇が咲いており、死因は窒息死だということです。警察はこれを殺人事件として捜査を続けています。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

雄英高校入学し…えっ？体力測定？聞いてないよ

『『へぇ!?』』

なんとも間抜けな声を上げてしまった。いや、え？はやくない？流れるようにグラウンドに来たけど頭が追いついていないよ？

「入学式は？ガイダンスは？」

さっきの女の子がオロオロして聞く。僕もオロオロしっぱなしだ。先生いわくヒーロー科に入学式はないそう。なんか合理的じゃないとか言ってるし…

それにしてもまた魔法が身体強化しか使えそうにない行事か…魔法って使えるのか使えないのかイマイチ分からないな…

「ここでは個性を使っていい。おい爆豪、個性使って投げてみろ。」

個性使わずの身体測定じゃないんだ…

「死ねぇ！」

…死ねって！かっちゃんも変わんないなぁ。みんな引いてるし…しかも７００オーバー!?すごっ…

「あとこの身体測定で成績最下位のやつ除籍な」

うえっ？僕はまた身体強化しか使えそうにないし、重ねてかけるにしても、最後まで余力を残しておかないといけない。あぁもう！やるしかない！

そうして身体測定に挑んだ。みんな自分の個性を活かす中、僕は変身して身体強化を少しずつ使って身体測定をやったけど、全身の力が強化されるから、余計なところに力入っちゃうからあんまり意味ない。ヤバい…このままじゃ除籍まっしぐらだ…

最後の種目はボール投げ。あと身体強化を使えるのは余裕を持ってギリギリ４回…それでも他がみんなより下だから一気に使うか…

？身体強化は全身にかけるもので1部分にかけるということしか出来ない。０か１００かなのだ。もうかけ切ってしまうか…？今の魔女モードの服結構目立つから早く脱ぎたい。もうあれだ。やるしかない。僕は身体に身体強化をかけれるだけかけて、思い切りボールを投げた。

身体強化は身体中の強化をする。今僕は４回かけたから、僕は２０倍の力を出せるようになっている。

――――もちろん思いっきり踏み込んだ足にも。

ズン！と足がめり込んだ。そのめり込んだ地面を気にせずに力いっぱい投げた。記録は７００ｍくらい。だいたいかっちゃんと一緒くらい。みんなもかっちゃんも先生も驚いていた。うわぁ…踏み込んだところすごいへこんでる。これどうしよう…後処理的な意味と雰囲気的な意味で。それよりこれで除籍回避出来たかな…

……結果は僕が最下位。入学して即除籍。心が抉られた。さっきの地面みたいに。あぁ…僕の高校生活ここで終わりか…

「さっき言った除籍処分の件…あれ嘘だ」

えっ？嘘？ジャアボクジョセキサレナイ？良かった…

すっごい焦った…あっなんか安心したら脱力感が…ううん。倒れてらんないよ。ここで倒れてたらヒーローにはなれない。踏ん張るんだ僕！

――――相澤先生視点

入試試験で同じ志望者を助けて、身体中が使い物にならなくなってた奴がいた。そいつは身体測定でも同じことをしようとしていたから、俺の個性で消そうとした。しかしあいつの個性は消えず、あいつは個性を使った。いや、消えなかったんじゃない。消せなかった。結果的に緑谷の身体が使い物にならない、ということは無かったが…おかしい…緑谷の力は〝個性〟ではないのか…？

――――――建物の影に潜んでいたオールマイト視点

あの…確か緑谷と言ったかな？相澤くんの個性を使われたはずなのに、まるで気づいていない。あの少女、興味あるな…なぜ服が変わるかは分からないが…それも個性のひとつなのか…？相澤くんも訝しんでいる。少し話してみるか…？それにしてもどう切り出すべきか…

ヒーロー科らしいやつ来た！

体力測定からは、普通に座学だった。さすが雄英高校。座学の内容もなかなか高度だ。ついでにメガネの男の子と女の子とは自己紹介した。飯田くんと麗日さん。２人ともとてもフレンドリーで早速友達が出来て嬉しい。

ココ最近になって新しい魔法飛翔「フライ」をゲットした。空が飛べるみたいだけど、調整がすごい難しい…この前は力を入れすぎて天井に頭ぶつけた。痛い…これ絶対たんこぶ出来たよ…でも今は練習したから飛べるけど…まだ実戦には使えないかな。

そしてある日、

「わーたーしーがー普通にドアから来た！」

キャーオールマイトだ！先生になったって言うのは本当だったんだ！うえぇ憧れの人が近い…近すぎてヤバい…語彙力が下がる…

オールマイトの授業はまさに実戦。ヒーロー側とヴィラン側で２対２で訓練を行うのだ。どこのチームと対戦するかはクジみたいだ。僕は麗日さんとチームを組むことになった。良かったー話せる人で。コミュニケーションは取れるね…

「デクちゃん！よろしくね！」

麗日さんは笑顔でそう言った。え、笑顔がまぶしい…えっと…じゃあ僕のチームはヒーロー側だから…ヴィラン側は？

かっちゃんと飯田くん。

終わった…過去で１位２位を争うくらい絶望してるよ…飯田くんはいいよ。真面目なだけって分かってるし、優しい。問題はかっちゃんだ。戦闘においてはカリスマとセンスが人一倍あるかっちゃんにどうやって…いや！今の僕には魔法がある。できるよ僕！

「じゃあ初期位置についてね！」

あー無理。緊張する。あっ変身しとかないと…変身するのも忘れるくらい緊張していると麗日さんが話しかけてくる。
「デクちゃん大丈夫？相手が爆豪くんだから緊張してるの？」
「うん…でも大丈夫！やってみせるよ！」
「プルスウルトラやね！」
そんな話をしているうちに訓練が始まった。僕達ヒーロー側は窓から入っていった。多分かっちゃんは僕を狙いに来るだろう。だから核を見つけるのは麗日さんにしてもらう。今透明化を使っているので、多分見えないと思うんだけど…
目の前にかっちゃんが居る。え？こっち見えてんの？すごい目が合うんだけど…と思ってたらこっちに爆風を浴びせてきた。嘘！透明化かけてるのに気づかれた!?
「おいこらデクゥ…居んのは分かってんだよォ…なんの個性使っているかわかんねぇけど出てこいよ」
…透明化が通じないとはね。さすがかっちゃん。気配までは消せないから、その気配を読み取ったんだろう。透明化も効果時間が切れる。魔法が解ける前に麗日さんには先に行ってもらった。ここでかっちゃんを止めないと！でも一応勝算がある。
「おぅ出てきやがったなデクゥ…俺が言ってんのになんで雄英に来たんだァ？」
「僕は雄英高校に行きたかったの！もう僕は他人に嘲笑われるだけの木偶の坊じゃない！」
かっちゃんは言い返してくると思っていなかったのか、驚いたような顔をする。だけど直ぐに顔を真っ赤にして爆風でブーストをかけながら急接近してくる。だから僕は――――――
『『［命令］！身体の力を抜け！』』
バタンッ。と、かっちゃんは倒れた。動くな、とかでも良かったと

思うが、変な体勢だと後々大変だからこれにした。命令は解除するまで消えない。ことが終わるまで待っててもらおう。
「かっちゃんごめんね!すぐ帰ってくるから!」
　身体の力を抜け、という命令のせいで口まで動かないかっちゃんはすごい睨みつけてくる。そんなかっちゃんを無視してそそくさとその場所を後にした。ごめんねかっちゃん!あっでも捕獲用テープで巻いとけば良かったな…
　その後は核の場所を先に麗日さんが見つけてくれていたおかげで、スムーズに…は行かない。飯田くんが強い![命令]はコストがかかりすぎる。飯田くんは速すぎて追えないから意味が無い。指さすとすごく警戒してくるから[命令]は使わない。なら…

――――――[睡眠]!
　範囲内の敵を強制的に眠らせるこの魔法。飯田くんはここから出ないだろうし、効果てきめん!だったんだけど、うっかり範囲内の麗日さんを忘れてて一緒に眠らせてしまった。[睡眠]と言っても浅い眠りだからすぐ起きるんだけど…ごめん、麗日さん。後で謝っとこう…と思いながら核にタッチした。
「緑谷・麗日チームの勝利!」
　なんとか勝てたな…あっかっちゃん忘れてた…[命令]ときに行こ…
「かっちゃんごめんね…今解除するよ」
　かっちゃんにかけていた魔法を解いた。かっちゃんはすごい剣幕で怒鳴ってきた。そりゃそうだよね…いつものように胸ぐらを掴もうとしてきた。でもこれ掴めるような襟がないんだけど…
　ふにゅん。

　…&$♪$」♡$&〃&$―=/_+>/>!?!?!?
「何するのかっちゃん!」

訓練会場にパチーンと大きな音が鳴り響いた。

――――――――爆豪視点

あいつは俺が知らねぇ間に力を身につけていた。くそっ…俺が昔言ったこと忘れたのか…？

あいつが帰ってきた。あいつがなんかボソボソ言ったら身体に力が入るようになった。この力はどういうことだ、色々聞きてぇことが山ほどある。怒鳴りながら中学の時と同じように胸ぐらを…

ふにゅん。

爆豪は思い出した。これは制服のように上の方に襟がない。胸ぐらを掴もうとしたら胸もんじゃいました？wとか今この状況は笑えないことに。

「何するのかっちゃん！」

パチーンと、爆豪の左頬にもみじがついた。

ちょっと柔らかかったな…と感触を思い出していたのは緑谷には内緒。

新キャラ来たる

僕の実践訓練が終わって、後に講評があった。やっぱりもっとスムーズに魔法を使えたらいいんだけど、まだまだ使い方が甘いよね…もっと練習しないと…

そのあとは他の人の実践訓練も見ていた。

その中で特にすごかったのは轟くん。尾白くんと葉隠さんが戦う隙も与えずに無力化されちゃった…さすが推薦されるだけの力を持ってるね…僕も力を使いこなしたらああいうのもできるかなぁ。やっぱり轟くんみたいな派手で威力のある個性だと…

＊緑谷はいつものようにブツブツとさながら念仏のように考察を始める。周りはちょっと引いている。それを気にすることも無く、いや実際気づいていないだけなのだが緑谷は考察を続けている。そしてそれをチラ見どころかガン見しているのは頬に可愛いもみじがついている爆豪。瞬きもせずに緑谷を見つめ続けている。ちなみに完全に無意識である。セコムとなる日も近いだろう。

ようやく訓練が全て終わったころにはもう日が暮れていた。かなりハードだったな…さすが雄英高校って所かな…身体中が痛いかも。かっちゃんのせいで無駄に2回魔法使っちゃったし…

＊緑谷は爆豪にビンタする際に身体強化を2回かけてから叩いている。

色々考えながら歩いていると、飯田くんと麗日さんが後ろから来た。

麗日「デクちゃん！途中まで一緒に帰ろ！」

緑谷「…う、うん！ありがとう！麗日さん！」

ひょえぇ～友達と一緒に下校してるぅ～さすが青春…とても楽しい…中学の時はそんなイベントなかったよぉ…

でもそれもまたありかも。

――――――帰宅後、自分の部屋にて

はぁぁぁ…疲れた…やっぱり雄英高校はついて行くのが大変…魔

法があってもやっぱり身体が鍛えられていないから、筋トレももっと頑張らなくちゃ…
『『あらぁ…そぉんなことないと思うんだけどぉ？』』
緑谷「そうですかね…でも皆はもっと上手くやってるし…自信無くしちゃうな…」
『『人にはぁそれぞれのペースがあるぅんだからぁ～自分のペースでぇやればいいと思うわぁ～』』
緑谷「そうだよね…自分のペースでコツコツやっていくことが大事だよね……んん？」
僕今一体誰と喋ってるの??すごく普通に喋ってたけど??
『『あらぁ？ごめんなさい自己紹介がまだだったわねぇ～私はアメリス・サクリアスよん♪ミリカヤの旧友っていったらぁわかるかしらぁ？』』
そう言って彼女は現れた。赤いショートボブの髪に白いメッシュ。いかにも魔女って感じの服。そして僕の恩人のミリカヤさんの名前。えっ？どうなってんの？
アメリス『ミリカヤとはよく遊んでたのよぉ！私たちを利用しようとした国家を殲滅したり、モンスターの軍団を召喚したりしてねぇ～』
なんか恐ろしい言葉が聞こえたような…ていうかミリカヤさん以外にも魔女っていたんだ。
アメリス『私今いわゆる脳内に直接話しかけてるのぉ～私も実体はもう何百年も前に死んでるしねぇ。まぁ私はミリちゃんみたいに人に力を授けることはしないわぁ～まだこの世界を見ていたいしぃ～』
うーん理解不能。えっなに？なんでここに現れるの？
アメリス『私がなんでここにきたか気になってるよねぇ？おしえてあげるわぁん♪』
心を読まれた…
アメリス『ミリカヤに力の使い方をあなたに教えてあげてっていわれたのよぉ～もう自分は長くないからって言ってねぇ』
ミリカヤさんが？僕のために？

アメリス『そぉよぉ～あの子の思いは無駄にしたくないからぁねぇ～それで私が今ここにいるってわぁけぇよん♪よろしくねぇ緑谷出久ちゃん♪』

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

なにも起こらないわけがない

我が主から作戦を聞いた。雄英高校が訓練を行う施設を襲撃するのだそう。私ももちろんついて行く。ヒーロー科の生徒やヒーローを作品にするのも悪くない。この前描いた絵も素晴らしかったが、もっと素晴らしい出来になるだろう。楽しみだ。どんな表情をするだろうか。絶望？怒り？それとも何もわからずにただただ呆然とするだろうか？花は生き生きと咲く姿こそが美しいと思う。しかし人はそうでは無い。私にとって人が1番美しくなるのは、死んだあとだと思う。身体がどんどん青く、白くなっていき、死後硬直で固まる。だがそれだけでは物足りない。そこに花を咲かせることでとても素晴らしい作品になる。考えただけでゾクゾクする。それにしても考えや趣味嗜好が違えどしたいことは一致する。彼に従って良かったよ。

――――――――私の主、死柄木弔に。

はぁいこんにちは！僕の名前は緑谷出久！魔法少女をやっているものさ！今日はＵＳＪに来ているよ！…まぁＵＳＪって言ってもＵ嘘の　Ｓ災害や　Ｊ事故ルーム

なんだけどね。ここではかなり本格的な訓練が受けられる。うわぁ…前よりドキドキするよ…

あっちなみに前に来たアメリスさんはだべってただけでなにも教えてもらってないよ！
『あらぁ～もうこんな時間じゃなぁい～私もう帰るわぁね～』
って言って早々に帰ってしまった。
＊みんなこれからの訓練のことを考えて萎縮する者、気合を入れる者、作戦を練る者など、訓練を見据えていた。

はずだったのに。彼らが来たことによって全てが崩れていってしまった。

＊突然時空が歪んだ。と同時にたくさんの人がそこからでてきた。これは想定外だったようだ。みな、動揺している。
……！急になんだ!?これも訓練の一環？いやでも先生たちがかなり焦っている。想定外のことが起こったのかも…
そう考えていると、さっき沢山知らない人達が出てきた時空の歪みが僕達を包んだ。そしてその時空の歪みは僕達をそれぞれ違う場所へ飛ばした。

…ここは？僕たしか飛ばされたんだよね？なんか揺れてる…って船の上??そうかここは実践訓練のために使われるはずだった場所か…水難ゾーンは結構厳しいかも…私の魔法は使い道あるかな…

「これは大変なことになったわね緑谷ちゃん」
「蛙吹さん!?一緒に飛ばされちゃったの？」
「えぇ…峰田ちゃんも一緒にいるわ」
「オイラもいるぜ！」
　ずっと考えてて気づかなかった…そうか1人で飛ばされちゃったんじゃないんだ良かった。
「そういやずっとおもってたんだけどよぉ…緑谷胸でけぇnゴフッ」
「峰田ちゃんがごめんなさいね。さて、この状況…どうしようかしら…」
　峰田くんが張り倒されてる…凄いな蛙吹さん。
「あと梅雨ちゃんと呼んで欲しいわ」
「ええっ!?いやその…」
　結構名前呼びはためらうよ慣れてないんだから。
「自分のペースでいいわ」
　そうなのか良かった…
　お互いに自己紹介をしていると、ヴィランの中の一人が船に近づいて船を触った。するとあっという間に花の茎やツルが僕達の乗る船を侵食して言った。
「えっ？なにこれ!?」
「縛りプレイ（意味深）…悪くないぜ」
　僕と蛙吹さんと峰田くんが戸惑っていると、ヴィランの1人が僕達に話しかけた。

『『すみませんお嬢様方。私の名前は咲良崎　花形。ヴィランです。出来れば抵抗せずすみやかに降伏して頂きたいのですがよろしいでしょうか？』』

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

なんかいる…

『『すみませんお嬢様方。私の名前は咲良崎　花形。ヴィランです。出来れば抵抗せずすみやかに降伏して頂きたいのですがよろしいでしょうか？』』

　なんかずぶ濡れでこっちに話しかけている人がいる…もしかしてこのつるや花ってあの人の個性かな…？これ、結構厄介かも…

「大丈夫かしら…」

「うぉいなんだこれ！やべぇんじゃねーのこれ…！」

　ダメだ！僕が不安になったら蛙吹さんや峰田くんまで不安になっちゃう！考えろ！なにか僕にできることは…！

『すみません…聞いてます？我寒いのは苦手でして…出来れば早めに結論を出して頂きたいのですが…』

　あーもう！あの人なに!?さっきからちょくちょく話しかけてくるんだけど！気が散るからやめて欲しいよ…

「とりあえず私達はお互いに個性を把握しておくことが大事だと思うわ…みんな相手の個性、知らないでしょ

」

　…そうだ！まだ雄英に入って間もないからまだみんなの個性を把握しきってなかったな。さすが蛙吹さん！

「梅雨ちゃんとよんで」

　えっ聞こえたの？口に出してなかったと思うんだけど？

「私の個性はカエルよ。カエルっぽいことなら大抵できるわ。舌を伸ばしたり…壁にくっついたり…あと毒性の粘液を出したりできるわ。あまり使う機会はないと思うけど。」

　へぇ…すごい個性だな。やっぱり雄英に入ってくるぐらいだから個性も有能だよね…本当に魔法がなかったら確実に落ちてたよね…

「オイラはモギモギ。頭のこれをもげる。これはあらゆる場所にくっ

つく。オイラにはくっつかず跳ねるようになってんだ。その日の体調とかでくっつく力が…かわ…っ…たり…」

「「うわぁぁぁぁやっぱりここではオイラが1番使えねぇぇぇぇ!!」」

「ええっ!いやいや全然そんなことないと思うよ!ほっほら君の個性をどうやって活用してヴィランに勝とうかと考えてたところだから!」

「うう…沈黙はきついぜ…そうだ緑谷お詫びに胸揉ませてく(((ゲフォッ」

「峰田ちゃんそれはダメよ」

◇その頃のかっちゃん◇

「なんでかすっげぇぶどうに殺意湧いてきた」

「なんか変なもんでもくったか?」

「あんだとクソ髪!」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「僕の個性は〜」

僕の個性を話した。まぁ厳密には個性じゃないからちょこちょこ誤魔化してるけどね…みんなの個性を聞いて思ったんだけど、みんなサポートすることが得意な個性なんだよね。例外は僕の身体強化。でもこれは部分的にかけることが出来ないし…このまま身体強化かけてゴリ押しもやれるけど、多分船が壊れる。

『すみません…大人しく捕まっていただくことって…』

悪いけどそれはできない。とりあえず命令でも使ってみる。
「[命令]！この人口池から出――――」
『おや危ないですね』
っつ！あの人、ギリギリでかわした！
『すみませんねぇ…どうしても指をさされるのは慣れてないんですよ…人の目とかにも結構敏感なもので』
ていうか水の中なのにあの速度で動けるとか…あれじゃ命令は当てられない…指がブレると命令も通らなくなっちゃう…どうしよう…拘束なら行けるか…？いやダメだ！あれは1人ずつしか拘束できない。それに拘束する力もまだ弱い。破られてしまう可能性が大いにある。
睡眠…ダメだあの咲良崎って人は目が合わない。それに敵と遠く離れてて目が合ってるかもわかんない！
『はぁ…多分何言っても俺の思い通りにはならないですよね…すみませんが私はもう充分待ったので、こちらから行かせて頂きますね。』
そう言うと彼は周りのヴィラン達を集め始めた。何をするのかと考えていると、集めた人に大きな蔓を持った花を咲かせていった。まるでその蔓がジャックと豆の木のようにこっちへ伸びてきて、繋がってしまう。切ろうにも切れない。恐ろしく硬い。これって本当に植物…？
『私の個性で出した植物は人から生やすと強度が上がるんですよね。こうやって…僕が歩けるくらいには』
そうして一歩一歩近づいてくる。ヤバい…このままじゃ僕達なにされるか分からない！
どうする…？
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

いざ脱出

どうすればこの危機的状況を回避することが出来る？僕達はどうすれば…

考えてる間に、コツ、コツと革靴の音が近づいてくる。もうあと数メートル。時間が無い。どうやって彼を倒す？

いや、別に倒さなくてもいいんじゃないのか？彼を足止めして逃げて、他の人達と合流できれば、助けを求められるんじゃないのか？今のままの僕らじゃ絶対勝てないし…悔しいけどこうするしかない。

「峰田くん！あす…梅雨ちゃん！こっちへ！」

僕は船の操縦室へと向かった。もちろん２人も連れて。

『おや？最後のあがきですか？まぁそれもまた一興ってやつですかね…』

僕は操縦室にこもって峰田くんのモギモギをまいた。影や死角になっているところに引っつけてもらった。その間に梅雨ちゃんと僕で回り込まれないように少ないけど障害物を置いた。多分あの人は面倒なことはしないと思う。障害物を退かしてまでこちらに来ないとは思うんだけどこれは完全に運。

『おや？随分ささやかな抵抗ですね…まぁこれもまた余興にはうってつけですね』

そう言って真っ直ぐこちらへ来た。よっぽど油断してるみたい。あとは峰田くんのモギモギに引っ付いてくれれば…

『はぁ…ここが終わってもまた次があるんですよね…我は絵を描きたいのですが…せっかく材料があると言うのに…もったいない』

なんか不穏なつぶやきが聞こえる。でも僕たちの策には気づいていないようだ。彼は下に引っ付いてるモギモギを踏んだ。

『ん？なんですかこれ…ってうわっ！』

足が引っ付いたはずみでコケそうになってモギモギに上手く手をついてくれた。これで脱出しても追いかけられることはないと思うけど怖いからもういくつかモギモギを付けておく。特に足にいっぱ

い付けておいた。
『おや…私、油断してましたね…これでは死柄木弔に怒られますね。どうってことないんですけど』
　彼のつぶやきを気にせず、僕達は水に飛び込んだ。そこからは泳いで水を出て、近くの茂みに身を隠した。すごくびしょびしょだったから、乾燥［ドライ］で乾かした。これ取得しといてよかった…。
「それにしても緑谷ちゃんいい判断だったわ。ありがとう。」
「オイラのモギモギ役に立っただろ!お礼に胸でｍ（(ブベッ」
「峰田ちゃんがごめんなさいね」
「出来れば蛙吹のむｎ（(ゴハァ」
「ごめんなさいつい舌が勝手に」
「ｓｍプレイだと…これも中々…」
「それより他の人達はどこに飛ばされたんだろ?心配だな…」
「今動くのはあまりよくないと思うわ。ちゃんと状況をしっかり把握することが大事よ」
　梅雨ちゃんの言う通りだ。まずはどこで何が起こっているかを把握しておこう。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

◇咲良崎ｓｉｄｅ◇
『いやー本当に油断したなー全く…』
　調子乗って追い詰めたつもりでいたらこれだよ、はぁ…あの敬語での喋りかた、すごく堅苦しくてしんどいなぁ。元がこれだから尚更だし…死柄木弔に忠誠心は欠片ほどもないけど、黒霧さんには拾ってもらった恩あるし…まぁあそこの中では一番偉いのが死柄木弔だしなぁ。それに僕のやりたいことやらせてくれるし…それにしてもこの状況どうしよ。手にくっついたこれ、取れないし…

『あー…本当はこんなことしたくないんだけど…まぁ仕方ないよねー。油断しなけりゃ良かったな』
思いっきり俺は手を引いた。手の平の皮が剥けた。痛いけど、まぁ昔よりまし。すごい血が出てる。自分でやっといてあれなんだけどグロいな…
『いちおう簡易救急セット持っといてよかったな…これからは持ち歩こう…』
それにしてもあの緑髪の女の子、可愛かったな…作品にしてもいいと思うけど、殺すのはもったいないなぁ…死柄木弔に命令されてもあの子は殺らないでおこ。
それにしてもまた会えないかな…

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

脱出後

「とりあえずあの場を脱出することが出来て良かった」
『そうね。あのままだとなにされてたか分からないわ。ありがとう緑谷ちゃん』
『なぁもませてくれよその緑谷のこぼれんばかりのおっｐ（ゴブッ』
『峰田ちゃん1回牢屋に入った方がいいわね』
『まじすんませんっした…』
「とりあえず他の人達や先生と合流しよう！もしかしたら一人でいる人もいるかもしれない！」
『…！1人は危ないわね…きょうりょくできることがあるかもしれないわ。探してみましょう！』
「途中ヴィランが来たら僕に任せて！殴り飛ばすから！」
『緑谷の言い方こえーよ…』
『それにしても随分遠くへ飛ばされたわね…ヴィランの個性にワープがあるのはやっかいだと思うわ』
「そうだね…みんなをバラバラに別れさせて戦力を分散させることが目的なんだろうね。ただ唯一救いだったのはヴィランが僕達の個性を知らなかったことと、僕達をなめてたこと。もしもヴィランが僕達の個性を知ってたらあ…梅雨ちゃんを水難ゾーンに飛ばしたりしなかっただろうし」
『それはそうね。でも戦力は私たちが圧倒的に劣っているわ。油断は出来ないわね…』
『えっオイラ空気じゃん』
「とりあえず他の人と合流しよう」
『えっオイラ空ｋ』
『急ぎましょう！いつ何が起こるかわからないわ！』
「うん！急ごう！」
『……遮られた…』
　合流しようとは言ったけど、どこにいるか分からないし…もうなんでこんなことに…ってあれ！相澤先生だ！

「ねぇ2人ともあれ！相澤先生じゃないかな！」
『ほんとね！やったわ！』
『あああああああ相澤先生ななななんか怪我してね!?』
　えっ？あっ！先生倒れてる！やばいかも…あの手がいっぱいついてるあのヴィランにやられたのかも！擦り傷や切り傷というよりひび割れたって感じなんだけどあれもヴィランの個性かな…どうしよう、格が違うことが見ただけでわかる。僕らがいっても無駄なんじゃないか…？
『どうしましょう緑谷ちゃん！あのままじゃ先生が…』
『どどどどどどどどうするよ緑谷！』
「待って！このまま策なしで突っ込んでも何も変わらないと思う！」
『でも先生が…』
「何かできることを考えよう！何も倒さなくてもさっきみたいに足止めできれば先生と逃げられるかもしれない！」
『何かって何すればいいんだよ緑谷！オイラたちにできることなんてあんのかよ！』
　峰田くんの言う通りだ。僕達はまだヒーロー科に入ったばっかりで、お互いほぼ初めて。連携がバッチリ取れるわけじゃないし…かなりやばいかも…
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

どうする？どうする？

緑谷たちが相澤先生を助けるために色々策を考えている時、恋する青少年・爆豪は…

『うおらぁっ！』

轟、と共に爆発が起き、次々とヴィランが倒されていく。切島と共にビルゾーンに飛ばされた爆豪だが、切島の存在が薄くなるくらいの大活躍をしている。あっという間にヴィランを一掃してしまった。

『弱えーなァこの雑魚共がァ！』

まさに悪人面そのものである。切島は若干引いていた。

『なぁ爆豪…これじゃどっちがヴィランが分からなくなって応援に来た人達にヴィランに間違われるんじゃねーか？』

『あんっだとこらァ！』

『それだよそれ！さっきお前に襲いかかったヴィランが不憫でならねぇよ…あんなの来たらそりゃちびるわ』

『あんっだこのクソ髪が！』

凄い口が悪い。これがなけりゃヒーローとして文句なかったのだが。神様が爆豪に優しさという感情を入れ忘れていたに違いない。

『そんなんだと女子が離れていっちまうぜ。緑谷とかよくお前の幼なじみやってんな。やっぱ緑谷のこと好きなのか？』

ちょっとカマをかけてみる切島。どんな反応をするのか気になったのだ。

（さーて、どんな反応すんだろ））

『……』

『…？おい爆豪？どうしたんだ？』

『……』

『なぁなんでそんな黙るんだよ！俺の言葉聞こえてなかったのか!?』
『……』
『…っ！おい爆豪！上！』
固まって動かなくなった爆豪に、隠れていたヴィランが襲いかかる。
が、その敵の首根っこを掴み床に叩きつけて、爆発を起こし気絶させた。
『……っつあああんなやっつっつっつべべ別に好きとかあああああああるわけわけわけねねねーだろろろ！』
目に見えて動揺しまくっていた。それを見た切島は、
（思ってたのと違うな…）
動揺しすぎだ、と爆豪の天邪鬼さを悟った。爆豪はまだ動揺していた。
『あああああいつのののこことななんてべべべべつにに…』
（聞かれてないのにまだ言ってる…）
『素直になれよな…』

緑谷ｓｉｄｅ
状況はかなり不利。あのヴィランの個性が分からない以上、僕達が不意をついても多分負けるだろう。でも先生を見捨てて行きたくない！
その時、黒い謎の人間（？）が現れた。ううん、人じゃない…なんというか…混ざってる？何が混ざってるかと聞かれても分からないけど、何か猛烈に違和感を感じる…
ヴィラン曰く、あれは［脳無］らしい。あの手が沢山ついたヴィランが言ってた。見た目からして強いな。でもどうやらあいには思考がない。最近そういうのもわかるようになってきた。

かなり前にアメリスさんが来た時、私に魔女の恩恵をくれた。魔法は教えてもらってない。もっとも、アメリスさんは覚えてなかったが。

『これ～あげるわぁ～わたしにはぁもういらないものだしぃ～あなたが使えば喜ぶんじゃなぁい？』

誰が喜ぶんですか？と聞いたらお餅が食べたいわ～と言ってはぐらかされた。いや多分本気で自分の言ったこと忘れてるな…

貰った恩恵は【魔女の瞳】。相手の気持ちや思考がある程度分かるらしい。あと対象の本性とかも。

恩恵のフィルターをかけた状態で見た脳無は、なんだか異質で嫌な感じがした。

どうしようかとずっと悩んでいると、入口付近から大きな音が聞こえた。そこに居たのは…オールマイト!?

『…！誰かが助けを呼んでくれたんだわ！』

『オールマイトだ！オイラたち助かるぜ！』

「オールマイト…！」

この状況から見たオールマイトは、まるで救いの神のようだった。

◇アメリスｓｉｄｅ◇

『何でも忘れちゃう私だけどぉ、あれは忘れずに渡せてぇ良かったわぁ～』

私の唯一の友達が遺した最後の約束。友達の頼みは忘れない。あなたのおかげでこの呪われた体に私は勝てたのよ。記憶が無くなる《忘却の呪い》。もう誰にかけられたかも忘れちゃった。何でも忘れていく私は元いた友達すら忘れてしまって、1人になってしまった。忘れたくないのに、呪いは私の記憶を蝕んだ。悲しかった。辛かった。どうして大事な記憶は忘れちゃうのに、嫌なことは忘れられないの？

そんな私にあの子は話しかけてくれた。
『そんな辛気臭い顔してひきこもってるから、何でも忘れちゃうのよ！おいでよ！忘れちゃうなら何度だって覚えさせてやるんだから！』
…ふふっ。ほんとにあの子の言う通り。今でもあの子との思い出は忘れないのね。大丈夫よミリちゃん。約束は果たすわ。私が消えてしまう前に…
あなたを殺すよう人々を唆したあいつを見つけ出してみせるわ。

普通科視点のヒーロー科
本編の合間に～普通科生徒の見聞録～

どうもこんにちは。私をただのモブと思うのはまだ早いわ。私にはモブとは違い名前が出ている。自己紹介が遅れたわね。私は雄英高校普通科、多々野　眼見《たたの　めみ》。しがない準モブよ。みんなからはめーみとかって呼ばれているわ。私の個性は〝多眼〟。私の顔には６つの目がついているわ。しかも目がとてもいいからなんでも見えちゃうわ。大体視力は１０．０ってとこね。

…いいや、そんなことはどうでもいいわ。私のことなんて些細なことよ。私が何を言いたいかって？それはね…あっ！ターゲットが来たわ！説明はあとにするわ！

緑谷「もーかっちゃん待ってよ！」
爆豪「うるせぇ。お前がおせぇのが悪ぃ。」

……ｋｔｋｒ！私の好みのシチュエーション！たぎるわぁぁぁぁぁ！燃えよ！私のオタク魂！ターゲットロックオン！ふぉぉぉぉぉぉ！

失礼したわ…あまりに好みのシチュエーションだったからつい夢小説のネタに…ゲフンゲフン見入ってしまったわ。私が言いたかったのはこれよ、これ！あ～くっつかないかな～ダメかな～絶対あの髪の毛ツンツンの男の子あの緑の髪のソバカスの女の子の事好きじゃん～トゥンデレかな？いいよいいよ～多分あの二人は幼なじみね…昔からの仲からふとした事で男の子は恋愛感情に発展。後にあいつのこと好きだからついいじめたくなっちゃって…

みたいな感じで女の子にちょっかいをかけたはず…いや？あの男の子…自分の恋心に気づいていないのかしら…？逆に女の子には恋愛感情は全くないわね…多分今までの男の子の行いで離れていってしまい、幼なじみの一線を超えることがなくなってしまった…ってとこね。ふむ…しかしこれはなかなか…おっ？

爆豪「お前昔っからトロイんだよ」
緑谷「もう！仕方ないでしょ！かっちゃん歩幅大きいんだもん。」

おっおっ？幼なじみ名物昔からお前は～でさりげなく昔からこいつのこと知ってっし…アピールゥ～！フッフゥ～！俺得ってやつぅ～？
しかも幼なじみ秘技、あだ名呼び！うっはやったぜ。もう嬉しすぎて昇天しそう。
爆豪「ほら…行くぞ」
おっおっ？おっおっおっお？手を出したよ？もしかしておててを繋ごうとしていらっしゃる？さぁどう出る？あのソバカスの女の子はどう出る？
緑谷「うん！ありがとかっちゃん！」
うっわぁ～かわえぇ～いいなぁあんな幼なじみ…私にもいるけど、下ネタしか言わないんだよね…あんな純真無垢な子が欲しかったなぁ。
爆豪「…デク、ちょっと待っとけ。手はまたつなぐからな…」
緑谷「えっ？うん分かった。最後なんて言ったの？」
おっ？男の子が勇気を出して女の子と手を繋いだのに手を離してしまって良いのですかね？

…ていうか、こっち来てない？えっ嘘…かなり遠くから見てたんだ

けど？
爆豪「…おい。さっきからうぜぇ」
おっふぅバレた。やっべぇぞこれ。
『すすすすすみません！ただのモブの分際で貴方様たちの恋模様を覗き見てしまって申し訳ございません！しかし1つ言いたいことがあります！発言権を私に下さい！』
アルティメット土下座した。へっ！私はこれで不良共をいなしてきたんだ！そんな脅しは効かないぜ！
爆豪「…変な事言ったらコロス」
ひぇ怖。ヒーロー科だよねこの人。
『あのあのあの、おおんなのこと手を繋いだところをみみたんですけどどど、あのソバカスの女の子に気があるのでしょうか…？』
爆豪「……」
あっこれ多分無自覚なやつや。と考えていたら、男の子が爆発した。ｏｈ……

緑谷「えっ？どうしたのかっちゃん!?」
あっ驚いて幼なじみの女の子まで来ちゃったよ。
緑谷「かっちゃんが何かしたの？本当にごめんね…後でかっちゃんには言っておくよ。」
はいかわいい。相手の心配しつつ幼なじみの面倒みるあたりよ～もうベストオブ最高。（語彙力）そんなことを考えていると女の子の服装が変わってた。
緑谷「もうかっちゃんったら…」
かるがると爆発して気絶した男の子を担いだ。
緑谷「かっちゃんがごめんね！じゃあ僕はこれで。」

……かっけぇ。夢小説のネタにしよ。

本編の間に～普通科生徒の言うことには～

こんにちは！私は雄英高校1年生、普通科の棘　針刺《いばら　はりさ》です！こんなトゲトゲした名前ですけど、性格はマイルドですよ！個性はもちろんその名の通り針です！大きいサイズから小さいサイズまでよりどりみどりですよ！この針でゆくゆくは鍼灸師とかやりたいですね！

あっと！私の話はいいんですよ！あの子が来ちゃう！いそがなきゃ！

…きたきたきた！ヒーロー科の緑谷出久ちゃん！うう～今日も可愛いぃー！あのまん丸の大きなおめめ、ソバカス、歩き方からすべすべぷにぷに（予想）のほっぺまで！あー完璧だ！

ん？私がどうしてこんなにあの子が好きか、ですか？いいですよ！特別に教えてあげます！

――――――――――ある日の放課後

『あーもう！ついてないっ！』

もうなんで私が家に帰ろうとした時に雨降るんだよぅ！天気予報では雨なんて一言も言ってなかった！くそぅ…お天気お兄さんを恨むぞ…ユルサヌ…

『傘ないんですか？それならこれ使ってください！』

えっ？もしかして私に？そう思って振り返るとそこにはふわふわの髪の毛の女の子。

『僕傘は2本持ってるんで、1本使っても大丈夫ですよ！』

『そっそう？ありがとう…そうだ名前！返す時に必要だと思うから、名前と学科！教えてください！』

『僕ですか？僕はヒーロー科1年、緑谷出久です！』

『1年？私と一緒だよ！普通科なの！』

『そうなんだ！お互い大変だけど頑張ろうね！傘は暇な時にでも返し

てねー！』
そう言って急いで走り去ってしまった。
私はもちろんこう思ったわ…
（（回り出したぜ恋の歯車！恋はいつでもハリケーン！我の春が！青い春が来たぜぇ！））

そこから私はあの子のストーkゲフンゲフン追っかけを始めたの…今日も可愛いなぁ…天使かな？天使だね。
むむ！あの子につんつん頭の男の子が近付いている！きーっ！あのつんつん頭の男の子は誰なの！もしかして彼氏!?ぬぬぬぬぬっ！羨ましい…
『あっ！かっちゃんおはよう！』
『……おう』
ぬっ！あの子が挨拶をしているのになんなのあの返しかた！うー私だって挨拶されたい！羨ましいっ！
『そうだかっちゃん昨日マイク先生に出された最後の問題なんだけど、難しかったよね…』
『あ？んなもん教科書見りゃ分かるだろ…』
『出たよ才能マン。あれかっちゃんやり方どうやってるのか教えてよ！』
『あぁ!?なんでてめーなんかに…』
『…だめ？』
ぬっ！あれは上目遣いだ！私もされたいー！
『ぐっ…別にだめじゃねーけど…』
『やったーありがとかっちゃん！』
くっ…どうやらあのつんつん頭は私の恋のライバルのようですね…
あっ…もう行っちゃった…朝からあの子に会えて幸せだったのに、なんだか複雑かも…

『おーい棘ー！もう少しでＨＲ始まるぞー！』
『あ、うん！すぐ行くー！』
雄英高校1年普通科、棘　針刺。恋に恋する思春期の男の子である。
『棘くん今日もあの女の子見てたの？』
『今日もちょー可愛かった！』
『良かったねー』